

「たぶ」の考察

田村忠士

「たぶ」については、これまで種々説明されているが、⁽¹⁾実際に即してみるとそれらの説明が当てはまらない場合が多い。たとえば木之下氏は「タビとタウビは同じ意味に考えてよいであろう。」として、「土佐日記」の補助動詞の考察から、

田舎の人や古風な人が用い、或は古風な老人に対して用いる。船君が目下の淡路の大きい御に対して用いた例もあって、敬意の高くない、古風なしかつめらしい言い方と思われる。

と結論される。しかし、当時すでに古風な語であった「たぶ」が、大鏡や古本説話を始めとして中世の作品にどうして多用されているのか。「たぶ」の説明となら問題は無い。すでに佐藤氏が指摘されていることだが「たぶ」は

ところで、韻文資料において、「拾遺集」が「たぶ」の現われる下限であることは注目に値する。これは散文資料において「源氏物語」が下限になっているのに符号するものである。「大鏡」の例は、「大鏡」の著わされた当時の言語の様相を示すというよりは、さらに古い時期の姿を示すといつてよからう。

といわれるように大鏡に見られるのが最後であり、それは世継や繁樹といった話者に応じて作者が意図的に用いたものである。他に土佐日記あたりにしか見られない「たいまつ」が用いられて

いるのも同様の意図によるものと考えられる。また木之下氏と同様に「たぶ」と「たうぶ」を——その派生において「たまふ」との閃連が考えられるためか——同一視するむきもあることにも問題がある。そこで本稿では「たぶ」をとりあげその性格用法に検討を加えたい。なおテクニストは特に断わらないかぎり日本古典文学大系による。⁽²⁾

「たぶ」が話し言葉としての性格の強いものであったことはすでに佐藤氏や西端氏の指摘があるが、より厳密に言えば、その補助動詞としての用法が口頭語的なのである。上代におけるこの用法の例が、口頭性の強い宣命に多く見られ、また高橋氏文においては天皇の「宣讀久」の言葉に見られるものであり、万葉集一二八の一例も贈答歌中におけるそれであることは、この語の口頭性を実証している。中古の作品においては、土佐日記、竹取物語、宇津保物語においてその用例が見られるが、土佐日記では「たぶ」五例中四例が補助動詞である。そのうち疑存の一例をのぞくと、すべて会話文に用いられている。竹取物語（竹取物語総索引・武蔵野書院）では、三例の補助動詞がすべて会話文である。宇津保物語では異文の多い一例をのぞいて三例すべてが会話文での使用である。ただ次の算物語の一例は現在の段階ではなんともいえない。

①……ついでるまいて、奉れたぶに、取りて見たまひ……（三五）
（二）

けれども右に見て来たことから、「たぶ」の補助動詞的用法において口頭語性の強かったということは認められるであろう。これに対して動詞としての用法は、どちらかというと地の文に多く現われるようであるが、会話文にも見られる。

「たぶ」は落窪物語に動詞として用いられるのを最後に、王朝のことに女性の手になる作品にはほとんど見られなくなる。源氏物語では会話文に補助動詞が一例それに地の文の二例であり、さらに木之下氏がある。

②「法師ばら、尼君の下衆どもの料に」とて、布など言ふ物をさへ、召して賜ふ。(⑤一〇一ペ)

は、右のようで「たぶ」となっていないが、これを加えても三例でしかない。しかもうち二例は「たまふ」の異文が諸本に見られ、決して確実なものとはいえない。残る一例は、

③あるべき限り、上下の僧ども、そのあたりの山がつまで、物賜び、尊き、事のかぎりを尽して、出で給ふ。(①三九三ペ)

であり、大系本の校異によるかぎり異文はない。けれども、この③によく似た場面での、

④……(源氏) そのわたりの山がつまで、さるべき物ども給ひ、誦経などして出で給ふ。(①一九七ペ)

のような一文と比較すると③においてどうして「たぶ」が用いられたのかの理由がつかない。夜の寢覚では

⑤「たちのかせたぶべきなめり」とみえ給ふに、いまぞ現心いでくる心地する。(二二五ペ)

寢覚めの上の心話部の一例である。主語が帝であるためか、「せたぶ」となっているが、「たぶ」が尊敬の助動詞「す」を伴うことはその用例上みられないことであり、これも確例とはしがたい。栄華物語では三例あり、その一例は会話文に用いられた補助動詞である。地の文のうち、

⑥……内くにもいかでありたべたらむと覚えたり。(上・二〇

〇ペ)

は、頭注で「あり給ひたらむ」と同じであるとしておられるが、「おはす・おはします」全盛の頃に「あり給ふ」という表現があったと考えられるだろうか、やはりここは他本の「ありへたらむ」をとるのがよいように思われる。その他狭衣物語では会話文に三例見られるくらいである。

以上のように見てくると、女性の手になるこれらの作品には「たぶ」はほとんど用いられなかったのではないかとすることができようように思う。

それではその理由は何か。

枕草子に次のような例がある。

⑦「けふ、この山作る人には、日三日賜ぶべし。また、まるらぎらん者は、またおなじ数とどめん」(二二九ペ)

動詞としての用法であるが、大系本の校異では異同が見られない。この為手は中宮あるいは帝としてよいであろう。けれども、

⑧「……その日まであらば、めでたき禄賜はせん」とす。私にも、いみじきよろこびいはんとす」(二三三ペ)

の「賜はす」と同等には考えられないであろう。ここには中宮に対する敬意が十分にこめられているといえるが、⑦はそのように考えられない。単に「与える」の意と解してもよさそうに思われる。

こうした「たぶ」は女性の作品には中世以降にも地の文において現われる。建礼門院右京大夫集では三例見られるが、その為手は平宗盛、斎院女房、源親長であり、そこに敬意を含ませる必要のない人物である。また弁内侍日記(大修館書店)における地の文の二例も同様である。一方、狭衣物語における会話文中の三例は別の様相

を呈する。二例は飛鳥井の女君の乳母の言葉に、一例は、

⑨「しか侍。明暮恋ひ泣きて、いとほれくしき様にぞなりて侍
れど、これに何事も訪ひ、仰言たべ」(二四四べ)

で、女君の兄である山伏の言葉に出てくる。このこの為手は直接の聞き手、狭衣である。したがってこの「たぶ」に敬意が含まれていないとはいえない。このことは何を意味するか。それは身分的位相、あるいは性的位相という観点の導入によって解決できる。乳母にしろ山伏にしろ身分的にはきわめて低い。そうした階級にあっては、動詞としての「たぶ」は敬語として十分に通用していた。しかしながら、宮廷にある女性においては、あまり品のよくない、下賤な言葉として意識されていたのではない。しかし、全く用いなかったわけではなく、会話においては⑩の「里なる侍」などの、相手が身分の低い者である場合には使用することもあったといえるであろう。森野宗明氏は、王朝貴族社会の女性においては「食ふ」ことの描写、あるいは直接的な表現が避けられていることを実証されているが、あるいは下二段に活用した「食ぶ」と音の上で通ずるところから、この「たぶ」もその使用に抵抗があって、女性の手になる作品にはほとんど用いられなかったといえるかもしれない。

さて、補助動詞としての用法であるが、原田氏は次のように述べておられる。

「たぶ」は宇津保や源氏では補助動詞的用法は見られない。これは「たぶ」「たうぶ」はもと一語であったのであるが、「賜う」の意は「たぶ」に、補助動詞的用法は「たうぶ」に整理されたことを見ることができる。

しかし、先にもみたように宇津保物語には例がないわけではなく、

また「たぶ」と「たうぶ」が同一化されたわけではない。だとすれば落窪物語以後の作品にはなぜほとんどその姿を見せなくなったのか。それは補助動詞としての「たぶ」が、全く口語化した結果、物語などの文章には用いられなくなったと考えられる。しかも先に述べたように貴族社会の女性にあっては「たぶ」に対する抵抗もある。そうした観点に立てばこのことは解決する。けれども彼女たちが日常の生活において全く使用しなかったかというところではない。多武降物語(群書類従)の次の例はそのことを示している。

⑪ わればかりうき身はなし。おとはおはしかよひたぶと。(四三二べ)

これはあい宮が少将に語ることばであるが、男性の手になる作品にはそれほど抵抗もなく「たぶ」が用いられ、しかもかなりの身分の女性が用いていたことが知られる。源氏物語においても異文はあるが一例会話中に用いられている。

⑫ 「かくばかりのしるしとあるなにがしを知らずしてや、おほやけには仕うまつりたぶ。はなはだをこなり」(二七九べ)

これは、その言葉づかいの上で一風交ったところのあるとされる博士の言葉だから何ともいえず、男性にはそれほどの抵抗のある言葉ではなかったのではない。そのよい例が落窪物語にある。

⑬ 「七十年余になりぬる身を召せ。若う盛りなる人の行末遠きをば返したべ」(下、一一五べ)

左大臣顕光の言葉であるが、こうした例のあるところからみれば、身分上かなり高位な者も男性にあってはかなり自由に用いられていたのではないかと思われる。以上のことから私は「たぶ」は平安時代において死語となつたわけではなく、位相的にみてゆけば上代か

ら受け継がれ、男性の手になる作品の多く残存する院政期においてその本来の姿を現わしたとみるべきだと思ふのである。

⑭……空より参らむ、羽賜へ若王子（三九〇）

⑮……法師に杵換へ給へ京の人（四一二）

のような比較的自由的な用いられ方をみてもこのことはいえるであらう。

先に補助動詞としての「たぶ」は口頭語的であるといったが、この傾向は院政期以後も変わらない。次は、「たぶ」の動詞・補助動詞としての用法が、地の文、会話文においてどのように現われるかを表にしたものである。これによると動詞は会話文にも地の文にも用いられるが、補助動詞は四十六例中わずか三例が地の文にみられるだけである。鑑集抄（岩波文庫）・愚管抄の例は、これらの文体の性格から考えれば地の文としての扱いは必ずしも正しくはないかもしれない。また上代や宇津保謡語のそれと同様「たまふ」とはほぼ同様な敬意を持っていることがいえる。

⑯（道長）飯・酒しげくたび、もちてまいるくだものをさへめぐみたび、つねにつかうまつるものは、衣裳をさへこそあてをこなはしめ給へ。（二四一）

原田氏は

中世の「たぶ」は、「そのわたりの山かつまでもたび」人源氏物語Ⅴなどの、「賜ふ」の意をもった「たぶ」から展開し、拡充された新たな形態としての「何をしたべ」であったのである。

とされるが、それが正しくないことは明白である。結局こうした見解は、源氏物語などの特殊な位相をもつ作品のみを資料にしたとこ

作 品 名	動 詞		補 助 動 詞	
	地の文	会話文	地の文	会話文
鏡集記	6			5
母日	2			
梨侍説	1	7		1
閑阿典	4			2
管拾	2		2	2
治京	6	3		5
宇大	11			8
建礼門院	3	11		
撰京大夫	5		1	1
日聞	2			
日記	9	2		3
語り	3	5		1
語り	2			
語り	2			
語り	13	1		3
語り	2	4		
語り	18	16		5
語り	6	3		13

ろからくる、あるいは、「たぶ」自体を上代や土佐日記などのわずかな例から考察した結果、「たぶ」が俗語的であると、敬意が低いとかいったものとした固定的な考察結果からくる誤りであるように思う。

「たぶ」は院政期以後の資料には非常に多く現われてくる。けれども女性の手になる作品にはやはり用いられにくい面があったように思われる。成尋阿闍梨母集（成尋阿闍梨母日記・白帝社）では成尋の言葉に二例、讃岐典侍日記（日本古典全書）には堀河天皇の言

葉の中に補助動詞が一例見られ、また大臣の「与える」動作に一例用いられる。建寿御前日記・中務内侍日記には全く見られない。弁内侍日記にあっては先に述べたとおりであるが、会話文においては敬意を有する「たぶ」が用いられる。十六夜日記（日本古典全書）においても為守の言葉に補助動詞が一例あるのみであり、うたたねには用いられない。ただ、とはず語りには女性の作品としては非常に多用されている。これは時代の趨勢もあつたのであるが、森野氏がこの作者について、

この二つ（「くこん」・「御十形容詞」——筆者注）をもっとも顕著な事象として、新生の俗語かと思われるものまでも含めて、当時まだ目新しかったにちがいないものを広範に採用駆使している事実から推すと、二条という女性は、用語・表現の選択において、きわめて大胆であり、無理を第一に中庸を心がけ、ともかくも伝統に従い、社会でのその安定性が公認保証されているような用語、表現を選択の基底に置くといった没個性の平凡派とはかなりちがっていらしい。

と述べておられるように作者のこうした気性の現われをみることもできよう。しかし補助動詞としての「たぶ」にはやはりなじまなかつたようで、この用法の「たぶ」は見られない。

中世における「たぶ」について桜井氏は、

（略）『延慶本平家物語』を精査された山田孝雄氏は「かくて、この時代にては、本来の下し与ふる義をあらはすは専ら『タブ』を用ゐる」「『タマフ』は常に尊敬の意を加ふる為他の動詞に付属せしめて用ゐらるゝのみとなれり」と述べられた。ロドリゲス『日本大文典』にも「与へる」といふ意。書き言葉に使はれ、話

し言葉では稀である」という説明があり、「賜ふ」よりも優勢であつたと考えられる。

と述べられるが、たしかに動詞としての用法は「たまふ」の領域を次第に侵して来ている。覚一本にあっては二例の「賜はず」が見られるだけで残りは全て「たぶ」である。太平記でも「たまふ」「たまはず」の例はほんの数例しかない。しかしとはず語りではその度合が遅く半々くらいに両者の比はなる。竹むきが記（笠間書院刊）では前者が三、後二者が四というところで、やはり女性の世界ではその度合が遅かつたのである。用法における特色では、

⑭ わが郎等競の流口をめして、これをたぶ。（平家物語上・二九五）

⑮ ……ふくよかなる衣一つぬぎて賜ひて……。（一八五）

⑯ 願ハクハ上人為レ我善根ヲ修シテタビ給ヘ。（太平記三・三一九）

⑰ 此女房何ニモシテ我ニ御媒候テタバセ給ヘ。（同二・三五三）
のようなものが見られる。⑭は地の文では尊敬語の用いられない仲間用いられたもので敬意を持たない、⑮も同様であるが、これらは為手と受けての身分関係を示すために用いられたものである。この頃、すでに敬意が失なわれはじめていたと思われる。そこで⑯・⑰のような、敬意を補足する形のものも生じてくることになつたのであろう。太平記はこうした表現が4例、いずれも会話文中に現われる。さらに平家物語や太平記では「下さる」の用例も見えるようになる。また「与へ給ふ」といった今昔物語などで多用される分析的な表現も中世の作品には散見される。

次に補助動詞としての用法を見てみたい。院政期あたりまでは⑱の例のように直接に動詞の連用形につくことが多かったが、中世に

入ると

⑨われ、この馬のくち引きてたべ(三八六べ)

のような「てたべ」の形をとるものが多くなる。平家物語には五例中四例、太平記に十三例の全てがこの形となる。すなわち補助動詞としての「たぶ」は「てたべ」の形に固定されてしまうのである。

私は先に建礼門院右京大夫集の敬語についての拙文を本誌に発表させていただいたが、その際もっとも取り扱いに悩んだのがこの「たぶ」であった。以来この正体不明な語の解明のための調査・検討を始めたのだが、一応自分の納得のゆく結論が出たように思う。

そこでこの際私の「たぶ」についての考え方を本稿で改めさせていただくこととしたい。しかしまだまだ不十分なところもあるであろうから、この稿に対してご批判・ご批評をいただきたい。

(1) 平安時代文学語彙の研究(風間書房) 原田芳起。

日本文法新書・平安流文学のことば(至文堂) 木之下正雄

「はべりたうぶ」について 研究年報(奈良女子大) 35・3

森重敏。

尊敬語「たうぶ」の性格 文芸研究・第四十五集 佐藤宣男。

「たぶ」考 滋賀大国文・第八号 西端幸雄。

なお、以下引用する右の各氏の御論はすべてこれによる。

(2) 上段は巻数を示す

(3) このか所については森重氏のご指摘がある。

(4) 宮闕巡入飲みたぶ。(二・二八二べ)

(5) 建礼門院右京大夫集における敬語 国文学攷・第六十七

号 筆者

(6) 王朝貴族社会の女性と言語(有精堂) 森野宗明。

——岩国高校教諭——